

秦始皇帝陵園における祖先崇拜と来世信仰

石田有香莉

秦始皇帝は13歳で秦王政として即位した前246年に、自らの陵墓造営を開始した。現在の陝西省西安市臨潼区にある驪山の北麓、その微傾斜地が陵園地として選定された。当時芷陽と呼ばれたこの地は、始皇帝の曾祖父である昭襄王の代より秦王室の葬地となっており、すなわち秦王政の陵墓造営は秦王室の伝統に則した形で始まったと言える。内外二重の城壁を有し、現在までに200近くの各種陪葬坑が発見されている壮大な始皇帝陵園だが、建設当初におけるその陵墓設計はあくまで従来の秦王と同様のものではなかった。それは一王としての陵墓であったためである。陵墓造営計画の大変更がなされたのは、前221年に秦王政が東方の六国を滅ぼし天下統一を果たしたことに因る。この直後から、秦王政は自らを皇帝と称したのであり、始皇帝陵園は伝統の枠に縛られた王陵から中国最大の権力者である皇帝の陵墓へと、築造プランの再構成を要したのである。始皇帝陵は皇帝陵というかつてない権力の象徴として、内外二重の城壁、兵馬俑坑等の様々な新施設を取り入れた。

本論での目的は、王陵から皇帝陵へと時代の推移とともに変容していく始皇帝陵園に表わされた信仰の変化を追うことである。秦王政の陵墓が秦王室伝統の葬地に築かれたことは、先代の陵墓形態に則して陵の造営が開始された事を表しており、すなわちこの時点における秦王政陵墓は祖先崇拜の性格を有した陵墓であったと言える。だが前221年に皇帝陵として造営計画が大幅に変更され、画期的な新施設を多数取り込んだ始皇帝陵には、従来の祖先崇拜の要素とともに、始皇帝個人を強く崇敬する姿勢が認められるのではないかと。

この問題に取り組む前に、まずは始皇帝陵園研究で課題とされる寝の位置について考察したい。寝とは、君主が祖先を祭る為に陵墓に附設する施設一宗廟を構成する造営物である。現在墳丘の西北110mで発見された南北約90m、東西約50mの建築遺跡が始皇帝陵の寝の所在とされているが、その主な根拠となっているのが西側遺跡で出土した「麗山飢官 右」及び「麗山飢官 左」と刻まれた二件の陶壺の蓋や「麗邑二升半 八厨」と底に書かれた陶盤である。楊寛氏は「麗山飢官」の「飢」は「飼」と同義であり、「飼官」とは飲食を奉供する官のことだという。さらに『説文解字』段玉裁注には「飢はもと食に作られた」という記述があり、飢官とは食官を指すと考えられる。ここで寝の働きについて述べると、それは祖先の靈魂が安住する為の施設であり、祖先の生活用品や衣冠が中に収められ、食物が奉供される場であった。この食物の奉納に従事した官こそが、食官である。また「麗邑二升半 八厨」の厨とは炊事場の意であり、食官が有していた厨房の設備を示していると考えられる。以上を根拠として、西側遺跡を始皇帝陵園における寝の所在とする説が有力視されているのである。

一方、始皇帝陵墳丘上の段差が表わす平坦部を寝の所在とする推論もある。現在は墳丘全体が植樹されているので確認し難いのだが、1908年に撮影された始皇帝陵墳丘の写真には、

確かに墳丘上に平坦部が認められる。この平坦部の意義は未だ明確にされておらず、戦国時代の中山王墓や魏王陵の墳丘頂上に寝が設置されていた実例があることから、一つの可能性として、始皇帝陵墳丘上の平坦部を寝の跡と見る説である。この問題には戦国秦の陵墓制度をもとに取り組む必要がある。前述の如く、始皇帝陵園が築かれた芷陽の地は昭襄王の代より秦の葬地となった場所であるが、この昭襄王陵を中心とする葬地一帯は秦東陵と呼ばれている。始皇帝陵墳丘上の平坦部に寝が置かれたとするならば、始皇帝以前で、かつ時代のあまり離れていない秦東陵王墓の墳丘上に建造物の存在を確かめられるかが、非常に重要となる。だが秦東陵内の莊襄王陵墳丘は近年建築工事の際に削り取られ、また昭襄王陵の墳丘は現存にしてわずか2-4mしか残っておらず、ともに造営物の存在を示唆する出土品が一切発見されていないことから、実際にはこれらの王墓より寝の所在を求めることは困難とされる。ここで着目すべきが、後漢の蔡邕撰『獨斷』中の、「始皇帝の時代になって、寝を(廟から)分離して陵墓の傍らに建てるようになった」という記述だ。つまり、始皇帝陵園内に寝は置かれていたが、それは墳丘上ではなく陵の傍らに築造されたというのである。西側遺跡出土の陶文及び本記述を論拠に、始皇帝陵の寝は西側遺跡に在ったとされているのだが、始皇帝以前の秦東陵内の王陵と比較検証が出来ない為により確固たる根拠を導くことが難しく、今後一層精密な調査研究が望まれる問題である。

さて、寝をめぐる議論からは始皇帝陵と始皇帝以前の秦王陵との関連性を十分に見出すことは出来なかったのだが、次に始皇帝陵が秦王陵の伝統を継承していることを確認したい。第一は秦王政(のちの始皇帝)の葬地についてだ。秦王政16(前231)年に麗邑という守陵都市が秦王政陵墓付近に置かれたのだが、その15年も前から政の陵墓造営は行なわれていたのであり、麗邑が造営される以前には芷陽の役人が秦王政陵を管理していたと考えられている。つまり昭襄王陵や莊襄王陵と距離にして10km程離れている政陵墓は、秦王室伝統の葬地である秦東陵の一部と見なすことが出来る。また鶴間和幸氏が論じるころでは、秦東陵内の各王墓の位置関係に着目したとき、昭襄王陵を中心に東方を前にして王墓群は展開しているという。すると各王陵の位置関係は南北に広がり、東へ向かって昭襄王陵を守るように広がっていることに気づく。この見地に立てば秦王政陵墓の配置も昭襄王陵を囲む陵建造プランに組み込まれていることが認められるのであり、政自身を崇める意味の前に、政王陵が先王への崇敬を表すための造営プランを有していたことが理解出来よう。昭襄王の東進を称えるかのように東方へ大きく広がっていく配置は、政の陵墓がこの段階においては伝統を継承するのみであったことを表している。

このように王陵として造営が開始された時点では、秦王政陵は秦王室の伝統的な陵墓築造様式に従っていたのであるが、天下統一の偉業を成し遂げ新たに皇帝の称号を用いた前221年を境に、陵墓築造計画は大幅に変更されたものと考えられている。王陵から皇帝陵への変化だ。しかし天下統一後の平和期においては咸陽城の拡張工事が陵墓造営より優先された。皇帝号を称したばかりの始皇帝にとって、死後の陵墓よりも現世の都城建設の方が重

要かつ早急に取り組むべき事業であったのだ。本格的な陵墓造営に取り掛かったのは、秦の対外情勢が悪化した前215(始皇32)年以降である。この時期に始皇帝は内外二重の城壁で陵墓を囲ったが、それは地下宮殿を外敵から守る為の警備用の意味合いが強かったとされている。ほぼ同時期の土木事業として北方の長城や軍糧輸送の運河(靈渠)、高速道路(直道)等の軍事的目的を有した施設が築かれたが、これらに当時戦時体制下にあった秦の切迫感が浮き彫りにされている。当時の秦の治世や対外情勢によって、陵墓造営の進行度合いや付随施設として求められる造営物は異なるのであり、ある一つの統一した造営計画に基づいて建造されたのではないことが分かる。

前210年に始皇帝が崩御すると、帝位を継いだ二世皇帝は陵墓の上に壮大な墳丘を完成させた。現存にして72mを誇るこの墳丘は、史上初めて中国を統一した始皇帝の偉業を称える、王陵から皇帝陵への革新的特性のようにも見える。しかし、『漢書』巻36において昭襄王陵の墳丘が始皇帝墳丘の高さと引き合いに出されており、先王陵墓との類似性が認められる以上、かの立派な墳丘は秦王陵の伝統に則した陵墓形態であったという既存の見解に、一定の理解を示さざるを得ない。

もともと王陵として築造されたこともあるが、始皇帝陵園には伝統的な秦王陵の陵墓制に則した部分が認められ、皇帝陵という革新性を有しながらも、祖先崇拜の性格も含有していることが理解できる。だが皇帝陵として、それまでの秦王陵には見られない施設も陵園内に附随されたのであり、その一つが1974年に発見された兵馬俑坑である。兵馬俑坑は皇帝陵としての革新的な新施設で、その存在意義を解くことは始皇帝陵の独創性を追求することに通じる。この問題はこれまで多くの研究者によって論議されてきたところであり、兵馬俑坑造営者を始皇帝とする立場からは天下統一後の権勢の誇示、現世の永続性とする説、また滅ぼした旧六国に対する畏怖の具現化、始皇帝の靈魂の防衛といった説が発表されている。造営を二世皇帝とする立場からは、対外情勢の緊迫化における反秦勢力に対する軍事力の示威とする説がある。この問題を考察するにあたり、一つの判断材料となるのが『史記』の記述だ。『史記』には始皇帝が後半生に不死を強く念願し、死を甚だしく憎悪した様子が多々記されており、その描写からは現世での死を避けつつも、始皇帝が同時に死後にも生を求めた可能性が感じられるのである。当時の靈魂観では、死後に靈魂は地下墓室に留まるので、始皇帝の靈魂は生前滅ぼした旧六国の人々の靈魂の脅威を、常に東方に抱えることとなる。これを考慮すると、不死を強く希求した始皇帝が自身の靈魂を守る為に、東を向く8000体とも言われる軍陣を地下世界に展開させたとは推測出来ないか。

苦しい現世の後に恵みある死後の世界を望む、すなわち来世信仰は皇帝陵としての始皇帝陵に表れた革新性の一要素であった。兵馬俑坑は始皇帝個人の目的で造られたのであり、祖先に倣った陵から個人の為の陵へと陵墓の性格が変容しつつあることが窺えよう。王陵と皇帝陵との分散性を始皇帝陵園に認めた上で多角的に陵園内の各種施設の造営意図を考察していくことが、今後の秦王朝に関わる新発見に繋がっていくだろう。